地理学史研究の方法論の検討

——1992年度秋季学術大会シンポジウムⅡ——

オーガナイザー：栗原尚子*・源 昌久**

趣 旨

「全ての地理学者は地理学史家である」（野澤，1992）。野澤氏の論文は、科学哲学・科学史・思想史とのかかわりにおいて、近年の地理学史研究の動向を考察し、今後の研究の方向性を示した啓発的な著作である。学問の発展にとって、学説史的検討は個別の研究者のレベルに限らず、専門的集団としての学界レベルで常になされるべき課題ではあるが、近年とくに、現代社会における地理学の有効性が問われ、地理学の研究フロンティアが他の学問領域と交錯するにつれ、その重要性が認識されてきている。地理思想史に関するシンポジウムは、日本地理学会では1984年秋季学術大会において「地理思想における伝播・伝承および革新——日本を主として——」という課題で行なわれて以来のことである。本シンポジウムは、ここ数年来の地理思想史研究作業グループの活動の集約でもある。報告は、他の学問分野における研究方法からみた地理学研究の逆照射、アマチュアリズムとアカデミズムの問題、日本における近代地理学の受容の問題、日本の地理学界における中央対地方の類型から把握した研究者集団の問題、翻訳という問題の書誌学的検討、教育における制度的確立などの角度から地理学史の方法論が検討された。

研究報告（座長：野澤秀樹）

磯部啓三（成蹊大）：社会的環境の評価の試み

環境と社会との関係をめぐって、さまざまな思索が展開されてきたが、そのなかの1つに、社会的環境の影響をめぐる思索の流れがある。

ボネフ Bonneff 兄弟の著書の復刊に寄せた序文のなかで、M. ペロー M. Perrot は社会的ルポルタージュ（「社会問題」、すなわち、労働者問題をめぐるルポルタージュ）に言及している。これらのルポルタージュのなかには、一種の参与観察によるものがあるが、なかでも、両大戦間期に、J. ヴェルドゥール J. Valdour がパリやその郊外の労働者を対象に行なった仕事は、明確な方法意識に貫かれており、注目に値する。

「経験による観察」の目的は、1つには、社会的環境が「群衆」としての労働者の行動や心理に及ぼす作用を評価することにあつたと思われる。ル・ボン Le Bon は、「環境、状況、出来事はその時々々の社会的暗示である」と指摘しているが、「群衆」論、「公衆」論の中心概念である「暗示」、「感染」、「模倣」と社会的環境は密接に関連するはずである。社会的環境が及ぼす作用の評価には、さまざまな困難が伴うが、J. ヴェルドゥールは、自然科学における実験に代わるものとして、「経験による観察」と呼ぶ方法を採用した。そして、環境を制御してその影響を観察する代わりに、自ら「赤い郊外」の環境の中に身をおくことによって、身をもって環境の影響を評価し、労働者の行動や心理に迫ろうとしたの

* お茶の水女子大学文教育学部

** 淑徳大学社会福祉学部

であった。(この主題に関して、すでに磯部(1986), Isobe(1993)で検討したことがある)。

長谷川孝治(神戸市外国語大): イギリス地理学におけるアマチュアリズムとアカデミズム——V. Cornish をとおして——

イギリスのアカデミックな近代地理学は、H. J. マッキンダー H. J. Mackinder を創始とし、19世紀末から独自の展開を遂げていくが、この正統派地理学に対して、在野地理学の伝統も深く育まれてきたのも事実である。1660年創立のRoyal Societyと同様、1830年に設立されたRoyal Geographical Societyの会員にも多数の貴族、軍人、探検家などが含まれていたことは、アマチュアリズムとしての地理的思考が広く社会に浸透していたことを物語っている。

このようなアマチュア的精神の典型として、H. J. マッキンダーの同時代人であるV. コーニッシュ V. Cornish を取り上げ、その生と研究の軌跡を追うことにより、20世紀前半のイギリス地理学を社会的コンテキストで捉えることを試みた。V. コーニッシュの生涯は、終生在野にありながら①表面波の透徹した観察、②幅広い学会活動、③風景美の分析と自然保護運動を追求しており、観察を主体とするアマチュアリズムを基本としながらも、アカデミズムや実践活動に深くかかわるものであった。

研究の歩みは、①海洋波などの「波学」から、②第一次世界大戦を契機とする戦略地理学・地政学、③広範な観察による風景学へと、段階的に変化していくことが明瞭であり、フィールドワークに根ざしたアマチュアの側面が強いゆえに、社会の動向に対して鋭敏な研究方向を探索していったといえよう。

以上のようなV. コーニッシュの姿勢は、同時代イギリスのアカデミックな地理学界、とりわけ政治家に転身するH. J. マッキンダーや教育に情熱を注いだA. J. ハーバートソン A. J. Herbertson

にも共通しており、イギリス地理学におけるアマチュアリズムの伝統を象徴するものといえる。

手塚 章(筑波大): わが国地理学界におけるラッツェル『人文地理学』の受容過程

本報告では、とくに戦前期を中心に、わが国地理学界におけるラッツェル『人文地理学』の受容のあり方を検討した。いかなる地理学思想であれ、その受容には必ず歪みを伴うものである。ラッツェル F. Ratzel の『人文地理学』は、なかでも歪みの大きな部類に入るであろう。このような観点から、直接関係する日本語文献を考察の対象として、大著『人文地理学』のなかのとくにどの部分が主として受容の対象であったかを考察した。

日本人にとって、ラッツェルの『人文地理学』はきわめて難解であった。その難解さは、彼のドイツ語表現の難解さという側面もあるが、しかし、それ以上に彼の地理学思想そのものの多面性に根ざしている。それゆえ、ラッツェルの地理学思想とは何かについて、紹介者の評価が一定せず、人によって紹介の内容や評価がかなり異なっている。このような評価の移り変わりに、学界の動向を重ね合わせることも容易である。

近代日本、とくに戦前期日本の地理学思想については、従来、日本の指導的地理学者ごとに個別的な研究が蓄積されてきた。そのなかで、ドイツやフランスをはじめ欧米の地理学思想が、彼らの地理学思想形成のうえで大きな役割を演じたことが、しばしば指摘されてきた。本報告では、これに対して、むしろ欧米の主要な地理学者(あるいは主要な地理学的著作)から出発して、わが国における受容過程を明らかにしようとした。国内における学派形成というよりも、各指導的地理学者が欧米の地理学思想から直接的な影響をこうむるという側面は、アカデミー地理学の確立が遅れた諸国に共通の性格である。したがって、とくに戦前期日本のような場合には、

上記2方向からのアプローチを併せ用いることが有効であろう。

岡田俊裕（広島大附属福山中・高）：近現代日本地理学思想史研究の方法と課題

かりに、近現代日本の地理学研究の流れを、「中央」の主流と非主流および「地方」の分流に三区分別できるとするならば、辻村太郎・飯塚浩二・三沢勝衛をそれぞれの代表的存在とみなすことができよう。辻村はおもにドイツ地理学の、飯塚はフランス地理学の影響が強く、三沢には欧米地理学の直接的な影響を認めることができない点でも対照的である。これら三者の研究活動の軌跡をたどるならば、当時の地理学思想史が多少なりとも立体的に展望できると考えられる。

その際、次のような方法を用いるべきであろう。第1に、個人史的な考察。従来、ある個人の学説は固定的に把握されることが多く、一面的な理解にとどまりがちであった。そこで、各学説を動的かつ多面的に把握するために個人史的な考察が必要になってくる。また、ひとりの研究者の知的関心・研究業績は、とくに優れた研究者の場合、特定の学問分野にとどまらないことが多い。したがって、その業績の全体を視野に入れないと、部分的内容も十分には理解できない可能性が生じる。「部分」を「全体」の構造のなかで把握するためにも、個人史的考察が必要であろう。

第2に、学説と時代思潮や学問的環境との関連性の考察。独自の理念のもとに一定の社会的責任を果たそうとするほどの研究者ならば、自己をとりまく時代思潮や学問的環境を鋭敏に受け止め、その動向に何らかのかたちで関与しようとするであろう。そのため、各人の学説が質的に変化することも起こるのであり、その変化の要因は、社会状況を視野に入れることによってはじめて理解できると考えられる。

今後の研究課題としては、まず小田内通敏を取り

上げるべきであろう。小田内から飯塚に連なる系譜は、非主流の地理学派といえる。このなかに石田龍次郎や小原敬士を加えることもできよう。そこで、非主流派の地理学思想史とでもいうべきものが構想されてもよいのではなかろうか。

また、小田内の（郷土）地理教育思想は、当時の地理教育界に大きな影響を与えたと考えられる。それは、主流派に限定されていた「文検」地理の出題委員たちが与えた影響とは異質であり、今日の地理教育思想に直接つながる内容をも備えていたと予察される。そこで、小田内と牧口常三郎や三沢の学説に力点をおいた（郷土）地理教育思想史が論述されねばならない。（郷土）地理教育思想は、1940年代に入ると国家主義的傾向を強め、地政学との関係を深めていったと考えられる。この言説の流行が当時の地理教育に与えた影響についての考察は、今後の重要な課題の1つとなろう。

地政学は、1940年代に入って急速に衰退した景観地理学に代わり、新しい主流を形成したとみなすことができよう。このような地理学界の動きは、どのような理論的葛藤や社会的状況のもとで行なわれたのか。それは第二次世界大戦後の地理学研究とどのようにつながるのか。敗戦前後の主流派の地理学・地政学説史もまた、今後検討する必要があると考えられる。

源 昌久（淑徳大）：地理学史研究における翻訳書誌の意義

文献目録という意味での書誌の一分野である翻訳書誌は、第二次世界大戦後、異文化国家間の学問、文化の交流が深まるにつれて盛んに作成されるようになった。その先鞭をつけたのがユネスコの *Index Translationum* (n. s. v. 1—, 1948—, Paris, UNESCO, 1949—, Annual) であろう。その後、特定分野での遡及的翻訳書誌も、日本の『社会科学年表』（山田秀雄編集代表）、ハーバード大学クレス文

庫の K. E. カーペンター K. E. Carpenter のフランス経済書の英訳書誌が発表され、特定主題の翻訳書誌が異文化国家の比較研究のための有力な基礎資料となることが証明された。

地理学史の研究分野では、翻訳書誌を研究のツールとして利用したり、これを実際に作成した例を見かけられない。報告者は、今回、アヘン戦争以降第二次世界大戦終了までの期間に中国で刊行された日本地理（学）書の中国語翻訳書誌の作成にとりかかった。この作業過程で、いくつかの問題点を見出した。第1に、翻訳作品を取り上げる場合には、翻訳の仲介者について調査する必要性。第2に、翻訳作業の内容の検討にあたっては、原著者の思想・思考がそのまますべて翻訳されているのか、あるいは、修正されたり、故意に歪められてはいないか。それらの点を詳細に調査しなければならない。第3に、翻訳書の原本の探究と、その選択の理由を解明しなければならない。第4に、翻訳書の量を点検する必要がある。

以上のさまざまな点を検討しつつ、報告者は、近代日本地理（学）書の中国語翻訳書誌を作成中である。日本は徳川時代、中国から方志の地理思想を輸入して地方調査作業を実施しようとした。この思想は、明治に入って皇国地誌編纂作業に受け継がれ、近代日本地理学の源の1つともなったのである。アヘン戦争以降近代化に遅れた中国は、今度は日本の明治期の地理（学）書の翻訳を開始した。この作業は中国の地理学の近代化にとってどのような意味をもったのであろうか。方志の伝統はどのように近代地理学に受け継がれたのであろうか。これらの諸問題の考察に対して1つの素材を提供することを試みたい。

栗原尚子（お茶の水女子大）：東京女子高等師範学校における地理教育の制度的確立

女子師範学校設立は明治7（1874）年に、建議さ

れ、明治8（1875）年に開講された。開講時の学科目に地理学がおかれ、第4級で『地理初歩』、『日本地誌要略』が、第3級で『日本地誌要略』、『萬国地誌畧』が教授されている。女子高等師範学校の地理教育に大きな転機となったのは明治18（1885）年に同校が東京師範学校に合併され、東京師範学校女子部と改称されたことに関連する（明治23（1890）年には分離し、女子高等師範学校となる）。残されている授業の要旨を示す文書の内容は格別に新機軸を示すものではないが、初代の地理学の専任教授として野口保興が東京師範学校から女子部に転任した点は注目される。

野口は「その地位に付随する発言と行動によって明治30年代から大正にかけて、隠然たる勢力を保っていた人物」とされる（中川、1978, p. 235）。野口は1860年江戸に生まれ、明治10（1877）年から明治15（1882）年までフランスに私費留学し、物理学・数学を修め、帰朝後東京師範学校の教員となった。野口はその略歴からみて地理学の専門教育を受けた訳ではなく、その意味では地理学にはアマチュアであったが、卓抜な語学力を駆使し、次々と地理学書を著わし、かれの地理学観を披瀝している。その代表作『提要 地理汎論 地文学』では、地理学の dualisme（地文学即ち自然地理学／人文学即ち人生地理学、地理汎論／地理特論、解明的地理／寫實的地理）にふれ、次いで19世紀中葉以降の Science géographique の発達についてコンテクチュアルな枠組みで把握している点は今日的な関心につながるものであろう。本報告の鍵概念である「制度的確立」の視角からみるならば、高等教育機関における地理学講座の開設と同様に地理学の普及に資する教科書と地図総覧の刊行を指摘している点は注目されよう。

学問の制度的確立に関する研究においては、制度的確立の概念規定が問題になる。制度化＝体制化とみるならば、そのことによってかすめ取られた問題

を明確に表象化することが重要である。

討 論（座長：野澤秀樹）

まず初めに、座長より各報告を接続する討議の課題が提出され、それに基づき討論がなされた。

いずれの報告も社会全体とのかかわりで、Social context の脈絡で研究を行なう近年の学説史研究の動向を踏まえていることが指摘できる。

1. 「参与観察」の社会学の研究方法は、社会とのかかわりそのものの方法論であり、他者の生活にどのように入り込めるのかという意味で、地理の学説史の研究手法として取り上げられるのではないか。

2. 「社会」とのかかわりの中で、「個人」の地理学の学問的形成に関連するアカデミックとアマチュアリズム、中央と地方、制度の問題が論点となる。

3. 外国の地理学者、地理学書の受容に関して、翻訳の問題は、「書誌学」的テキスト・クリティックが必要とされる。

4. 制度化の問題

以上の4点に集約するように討議が進行したが、シンポジウムの課題に掲げられた「方法論」に関し

て、2つの側面からの解釈により、論点が錯綜した。1つは、学説史研究方法論の学説史的展開であり、他方は、実際の研究の方法すなわち書誌学的方法である。

最後に、IGUの地理思想史コミッション委員長の竹内啓一氏より、同コミッションの活動状況と1993年の国際集会についての案内がなされた。

文 献

- 磯部啓三（1986）：J. ヴェルドゥールのみたパリとその郊外における労働者の生活環境。成蹊大学経済学部論集，16，23-31。
- 中川浩一（1978）：『近代地理教育の源流』。古今書院，p. 362。
- 野澤秀樹（1992）：地理学史研究の方法——科学哲学・科学史・思想史とのかかわりにおいて——，人文地理，44，47-67。
- Isobe, K. (1993): Aux marges de la description géographique et de l'enquête sociale, Notes sur Jacques Valdour. Claval, P. ed.: *Autour de Vidal de la Blache. La formation de l'école française de géographie*. CNRS Editions, Paris, 65-69.

SYMPOSIUM II

Recent Trends in Studies on the History of Geographical Thought

Organizers: Hisako KURIHARA* and Shokyū MINAMOTO**

Recent studies on the history of geographical thought have been based on recent developments in studies on methodology and epistemology in the history of science. A central claim is that studies on the history of geographical thought need to explore the relations between the "Social Context" and individual geographers, or various institutions.

Since the latter half of the 1980s, the study group on geographical thought (one of the study groups in the Association of Japanese Geographers) has focused on studies on the history of modern geography in the early Meiji Era. The principal themes are: 1) the influence of foreign professors employed by the Meiji Government who played an important role in introducing modern scientific geography; 2) the establishment of geography as a professional discipline and the opinions of non-academic geographers; 3) the foundation of geographical societies; 4) the institutionalization of modern geography.

Six articles contain the results of our study group.

K. Isobe: The experience of social milieu: The method of J. Valdour.

K. Hasegawa: Amateurism and academism in the modern geography of the United Kingdom.

A. Tezuka: Some remarks on the diffusion of F. Ratzel's "Antropo-geographie" in Japanese geography.

T. Okada: The methodology and research theme of studies on history of geographical thought in modern Japanese geography.

S. Minamoto: The importance of the bibliographical text critique in studies of translation.

H. Kurihara: The institutionalization of geographical education in the University of Tokyo Joshi-shihan.